

平成28年度郷土歴史講座

「越ヶ谷・大沢地区の歴史について」

講師 加藤 幸一 氏

(NPO法人越谷市郷土研究会 顧問)

郷土の歴史について、わかりやすくお話をしていただきます

	日程	時間	募集	内容	場所	備考
B コース	第1回 5月11日(水)	午後2時 ～午後4時	80人 定員	講座	市立図書館 2階 視聴覚ホール	Aコース受講の方 は必ず2日間 ご参加ください
	第2回 5月18日(水)					
A コース	第3回 5月25日(水) または 6月 1日(水)	午前9時 ～午後5時 (予定)	各日 20人 定員	現地研修 (バス乗車 & 徒歩)	越ヶ谷・大沢 地区の歴史 めぐり	現地研修は各日 同一の内容です 希望日を お書きください

申込方法

◎往復はがきでお申し込みください

○受付期間 4月28日(木)市立図書館必着

○記入事項

①Aコース:講座と現地研修 3日間コース

Bコース:講座のみ 2日間コース

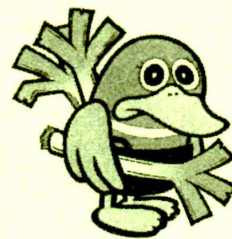
※Aコース(現地研修の希望日をお書きください) か Bコースを明記してください

※現地研修のみの申込みはできません

②郵便番号 ③住所 ④受講希望者氏名(1枚につき1人) ⑤電話番号

※希望者多数の場合は抽選となります

※テキスト代・受講料等は無料です



越谷特別市民
ガーヤちゃん

あて先・問い合わせ先

〒343-0023 越谷市東越谷4-9-1

越谷市立図書館 郷土歴史講座担当

【電話 048-965-2655】

越ヶ谷御殿周辺の古道

法人 NPO 越谷市郷土研究会

加藤 幸一

「越ヶ谷瓜の蔓」に見る越ヶ谷と越ヶ谷御殿

加藤 幸一

「越ヶ谷瓜の蔓」は、福井猷貞が文化文政年間に書いた越ヶ谷町に関する地誌である。

〔原文〕

一、越ヶ谷と申名目ハ、奥州筋より登り候ニハ大沢の芝生川原より山の如き御殿地相見、元荒川の谷を越村と号せし也、其後町二成、小名相分レ申候ハ御高札元本村と云を本町と云、又慶安後、中町橋向ハ新規之町ゆへ新町と云、会田出羽持切之所ゆへ一組中町と号、二七市日ハ本町・中町ハ一並日也、元本道なれ共日光道筋二相成申候儘横町と唱、中町本町之裏故袋町と唱、又其裏通御殿下というハ御主殿下通也、

〔意訳〕

一つ、「越ヶ谷」という名称のいわれは、奥州街道筋を北から江戸に向かって上って行き、大沢の元荒川の芝生の河原より対岸を見上げると、御殿の土地（元荒川の自然堤防の小高くなった土地で、大正年間にかなり削られた※1）が山のように見えて、元荒川の周辺の低地の谷を越す村という意味から由来する。その後、町の中に小さな土地名が発生していくつかに分かれ、大沢橋たもとの南詰め東側の高札場のある一帯の元の本村を「本町」というようになる。また慶安年間（一六五〇年頃）以降、本町から見ると、日光街道に架かる中町橋（橋の下には六本木落とし堀が観音横丁の通りの南側に沿って元荒川に流れ注いでいる）の東の観音横町の通りの南側の方と西の赤山街道（現在の越ヶ谷小学校の南側の通り）の南側の方は、新規の町のため「新町」という。ご存知の会田出羽家の持ち分の中町橋の北側の一帯は、越ヶ谷宿（※2）の中程にあるゆえに、ひとまとめにして「中町」という。二七の市の日の本町と中町とも同じ日に行われる。元の奥州道の本道であった観音横町の通り（南百から元荒川に沿ってやってくる土手道の古奥州道から西方に折れて続く通り）が、奥州道筋から日光道筋になってから「横町」と呼ばれるようになる。中町と本町の東方の裏側一帯は袋のように成立した町なので「袋町」と呼ばれ、また、その元荒川側の裏通りの「御殿下」というのは「御主殿下通り」のことである。

※1. 増林のお茶や御殿からこの地に移ってきたのは慶長九年（一六〇四）である。

「山の如き御殿地」は、高崎力氏によると、大正年間にかなり削られてしまい、その削った土は対岸の大沢側の河川敷に埋められて、現在は宅地化されているという。

その頃は、まだ古奥州道に頼り、直線の日光街道（日光道中）はできていないのである。

※2. 越ヶ谷宿が成立したのは、私見ではあるが元和二年（一六一六）頃であろう。

※次の頁の地図中にある「元御殿」の地名の意味

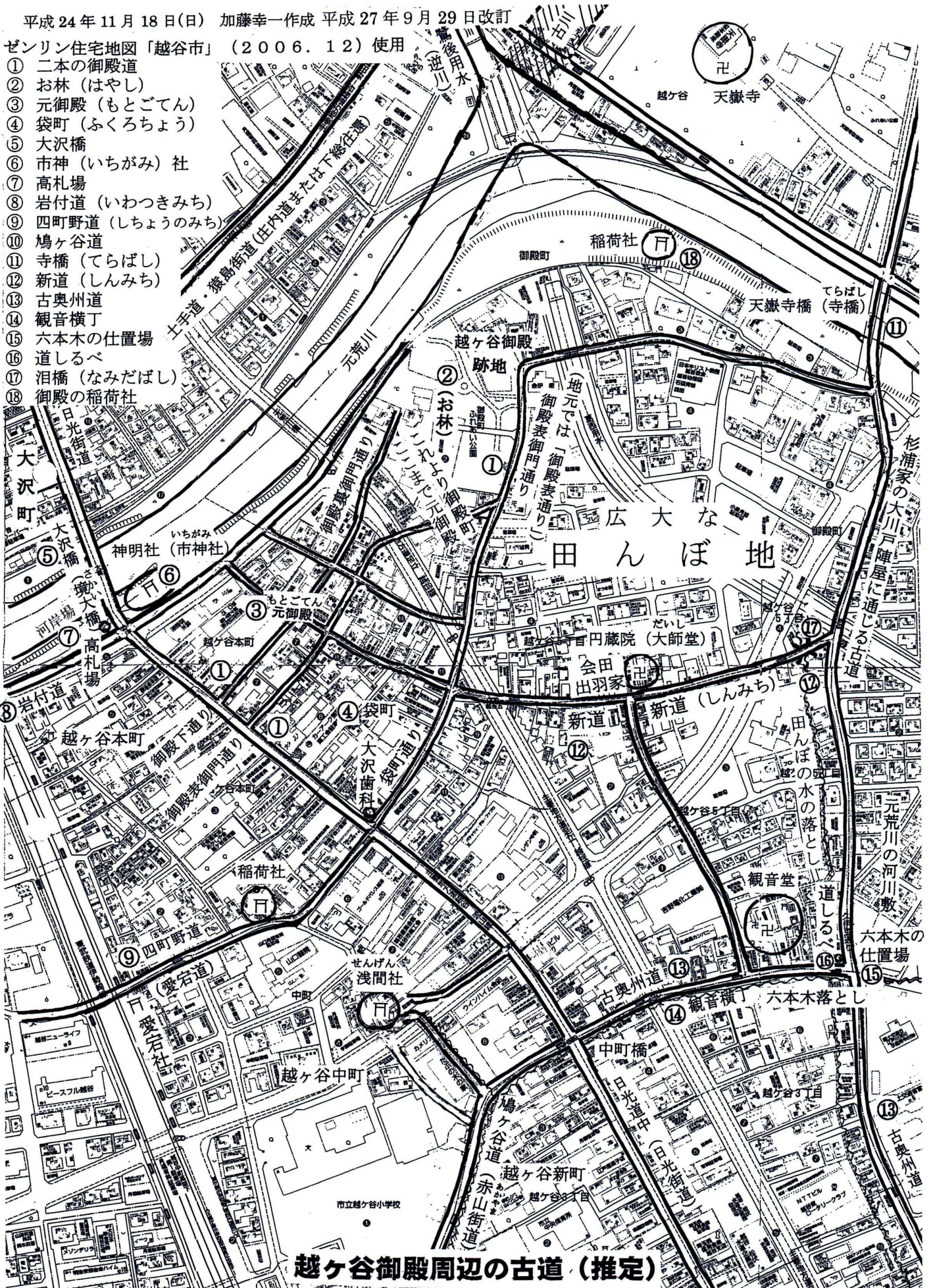
旧道（日光街道）と新道（足立越谷線）に挟まれたこの辺りに、「元御殿」という地名が残っている。これは、この地までかつては御殿の敷地内であったことを意味しているのであろう。当時は、日光街道はまだできていなかったから、御殿は古奥州道のそばにできた。結果的には後の日光街道から離れた所となってしまうのであろう。

平成二十五年一月八日作成

平成24年11月18日(日) 加藤幸一作成 平成27年9月29日改訂

ゼンリン住宅地図「越谷市」(2006.12)使用

- ① 二本の御殿道
- ② お林 (はやし)
- ③ 元御殿 (もとごてん)
- ④ 袋町 (ふくろちょう)
- ⑤ 大沢橋
- ⑥ 市神 (いちがみ) 社
- ⑦ 高札場
- ⑧ 岩付道 (いわつきみち)
- ⑨ 四町野道 (しちょうのみち)
- ⑩ 鳩ヶ谷道
- ⑪ 寺橋 (てらばし)
- ⑫ 新道 (しんみち)
- ⑬ 古奥州道
- ⑭ 観音横丁
- ⑮ 六本木の仕置場
- ⑯ 道しるべ
- ⑰ 泪橋 (なみだばし)
- ⑱ 御殿の稲荷社

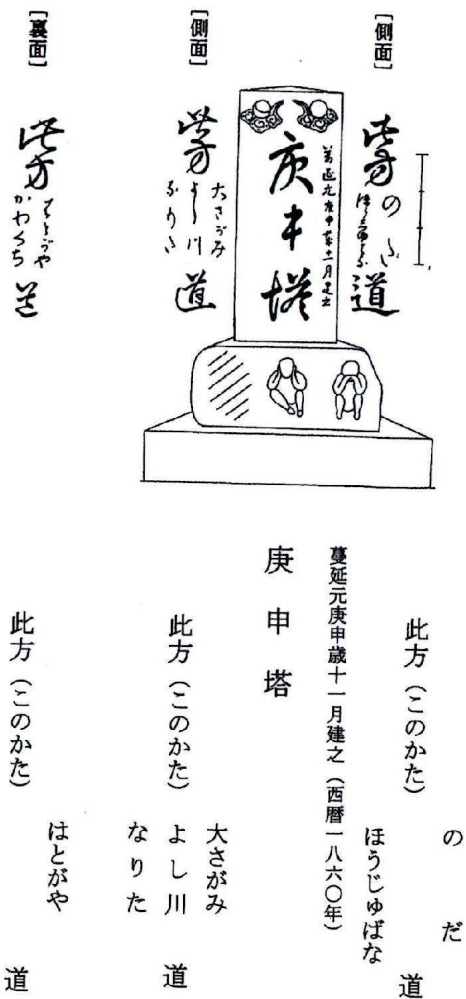


越ヶ谷御殿周辺の古道 (推定)

「越ヶ谷御殿周辺の古道」の地図解説

加藤 幸一

- ① 二本の御殿道・・・日光街道から越ヶ谷御殿に行く道。
御殿下通りと御殿表御門通りの二本があった。
- ② お林(はやし)・・・「お林」と呼ばれたこの地域が越ヶ谷御殿のあった所と伝えられる。
御殿地は、こんもりとした高い土地であった。
- ③ 元御殿(もとごてん)・・・かつては、この地域まで越ヶ谷御殿の敷地であったからこのように呼ばれたのだろうか。
- ④ 袋町(ふくろちよう)・・・職人の町。
江戸時代に書かれた「越ヶ谷瓜の蔓」には、「山の如き御殿地」と表現している。
- ⑤ 大沢橋・・・正式には「大橋」と言い、かつては武蔵国と下総国との境にある橋であったため、「境大橋」「境板橋」とも呼ばれた。
- ⑥ 市神(いちがみ)社・神明社とも呼ばれる越ヶ谷本町の鎮守。
越ヶ谷に開かれた二と七の六斎市(ろくさいいち)の市場の守り神。
- ⑦ 高札場・・・大沢橋のたもとに、人々に知らせる立て札である高札場があった。
- ⑧ 岩付(いわつき)道・岩槻に行く古道。
- ⑨ 四町野道・・・日光街道から四町野村(現在の宮本町)に行く古道。
(しちようのみち) 途中、愛宕社があるので、「愛宕道」とも呼ばれた。
- ⑩ 鳩ヶ谷道・・・地元では「鳩ヶ谷道」と呼ばれ、日光街道から鳩ヶ谷に行く古道。赤山陣屋に通じる。
- ⑪ 寺橋(てらばし)・・・現在は、「宮前橋」と呼ばれている。
江戸時代は「天獄寺橋」と呼ばれた。
- ⑫ 新道(しんみち)・・・文政年間に会田出羽家によって新しく作られた会田出羽家から越ヶ谷の久伊豆神社に行く古道。新しく作られた道という意味で、「新道」と名付けられたと思われる。
- ⑬ 古奥州道・・・江戸時代以前からあった古道。
- ⑭ 観音横丁・・・沿道に観音堂があるので、このように呼ばれた。
- ⑮ 六本木の仕置場・・・ここで処刑が行われた。
- ⑯ 観音横丁の丁字路角の六本木にあった庚申塔(こうしんとう)の道標(道しるべ)・・・現在、中町の箕輪家保管



- ⑰ 泪橋・・・六本木の仕置場と関係していて、罪人とその家族が涙を流して別れる橋という意味であろう。
- ⑱ 稻荷社・・・社殿には3代將軍家光の書いた額があったが、明治20年ころに盗難にあって、今はないという。
この稻荷社は、越ヶ谷御殿と関連する越ヶ谷御殿ゆかりの社であろう。

※右記の裏付けとなる参考資料は、原資料として加藤幸一著「古絵図解説」(越谷市立図書館二階所蔵)、特に資料番号42「越ヶ谷宿村絵図」。古奥州道は、加藤幸一著「江戸時代以前の越ヶ谷を通る古奥州道」(会報第十六号「古志賀谷」)、越ヶ谷御殿は、加藤幸一著「越ヶ谷瓜の蔓に見る越ヶ谷と越ヶ谷御殿」を参照のこと。



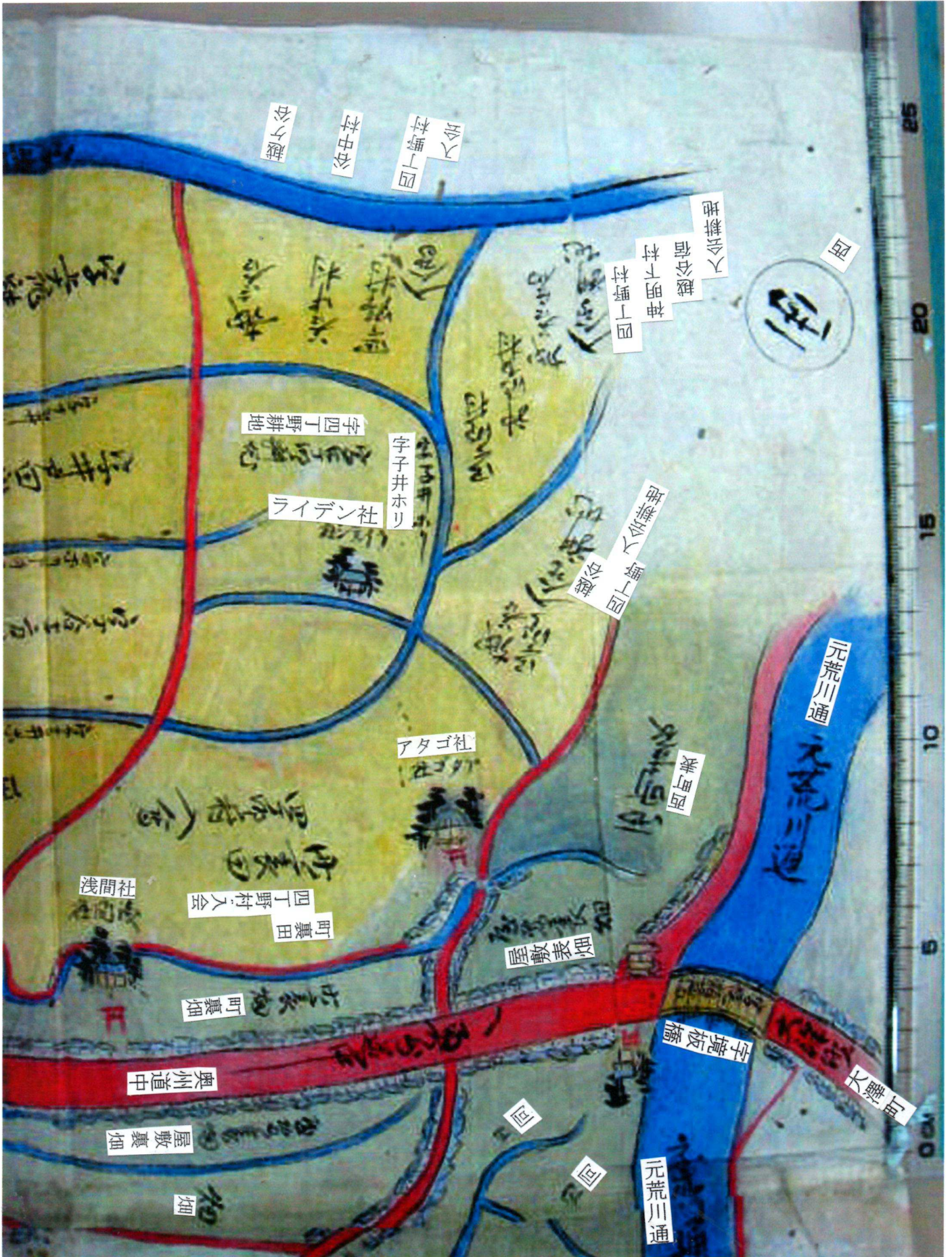
江戸期 越ヶ谷宿・村絵図 No.1

絵図類の部 資料番号 4 2





※寺橋（てらばし、現・宮前橋）は、江戸時代に「天ヶ谷寺橋」と呼ばれていたことがわかる。
 ※元荒川を地蔵橋が架かる現在の逆川が元荒川に合流する地点の天ヶ谷寺の裏で締め切ったためにできた古川（天ヶ谷寺の裏を通り、花田の周りをめぐった元荒川）が、天ヶ谷寺の裏に水路のように直線で描かれている。





越ヶ谷地域の神社仏閣



天嶽寺



越ヶ谷の久伊豆社



新道しんみちの円蔵院（大師堂）



大沢橋、越ヶ谷宿いちがみの市神社、高札場



越ヶ谷中町せんげんの浅間社



越ヶ谷新町はちまんの八幡社



越ヶ谷新町の薬師堂



小林村の瓦曾根溜井の水神社

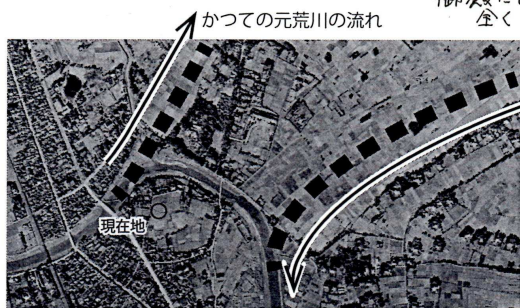


四丁野村の今はなき愛宕社と雷電社



※四丁野村の愛宕社は、江戸時代は東武鉄道の東側の四丁野道の南側、現在の中町3の場所に中町の浅間社と同じように小山の上にあった。このあたりまで四丁野村であった。その後、現在の「健美の湯」の北側駐車場の北隣（宮本町二丁目186の西隣、かつての会田太郎兵衛屋敷内）に移されたが、現在はそれも壊されて更地となった。

将来アパートになる土地に限る発掘調査。ただし道路側は破壊されていて発掘の意味がなくなり、
 試掘→緊急発掘→記録 越ヶ谷御殿跡 現地説明会資料 鎌倉末から室町初期
 保存→埋めどしと進む 御殿に関する遺物は 全く出ていない。



かつての元荒川の流れ

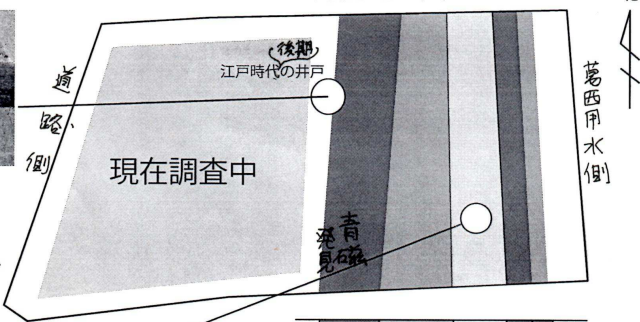
平成28年2月23日実施
 越谷市教育委員会 生涯学習課

現在、御殿町の北側を区切る元荒川の流れは江戸時代になってから開削されたものです。開削時期は越ヶ谷御殿が解体された明暦の大火(1657年)後とも、その前ともわれています。

左は昭和22年の航空写真ですが、今回の調査区はかつて田んぼとして利用されていたことが分かります。



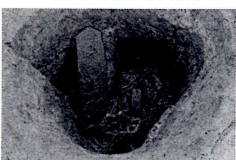
漆のお椀や部材など、井戸を埋めるときと一緒に捨てられた木製品が多数出土しています。深さ2m以上



現在地 ★



出土した板碑



板碑が埋まっていた穴
 発掘のため掘られた穴の底に立てられている状態で発見

溝が複数回にわたって掘られていることが分かりました。
 南北方向の溝が5つあり

板碑と同じごろの年代の中国産青磁が出土。一番新しい溝の年代が鎌倉時代末から室町時代か？

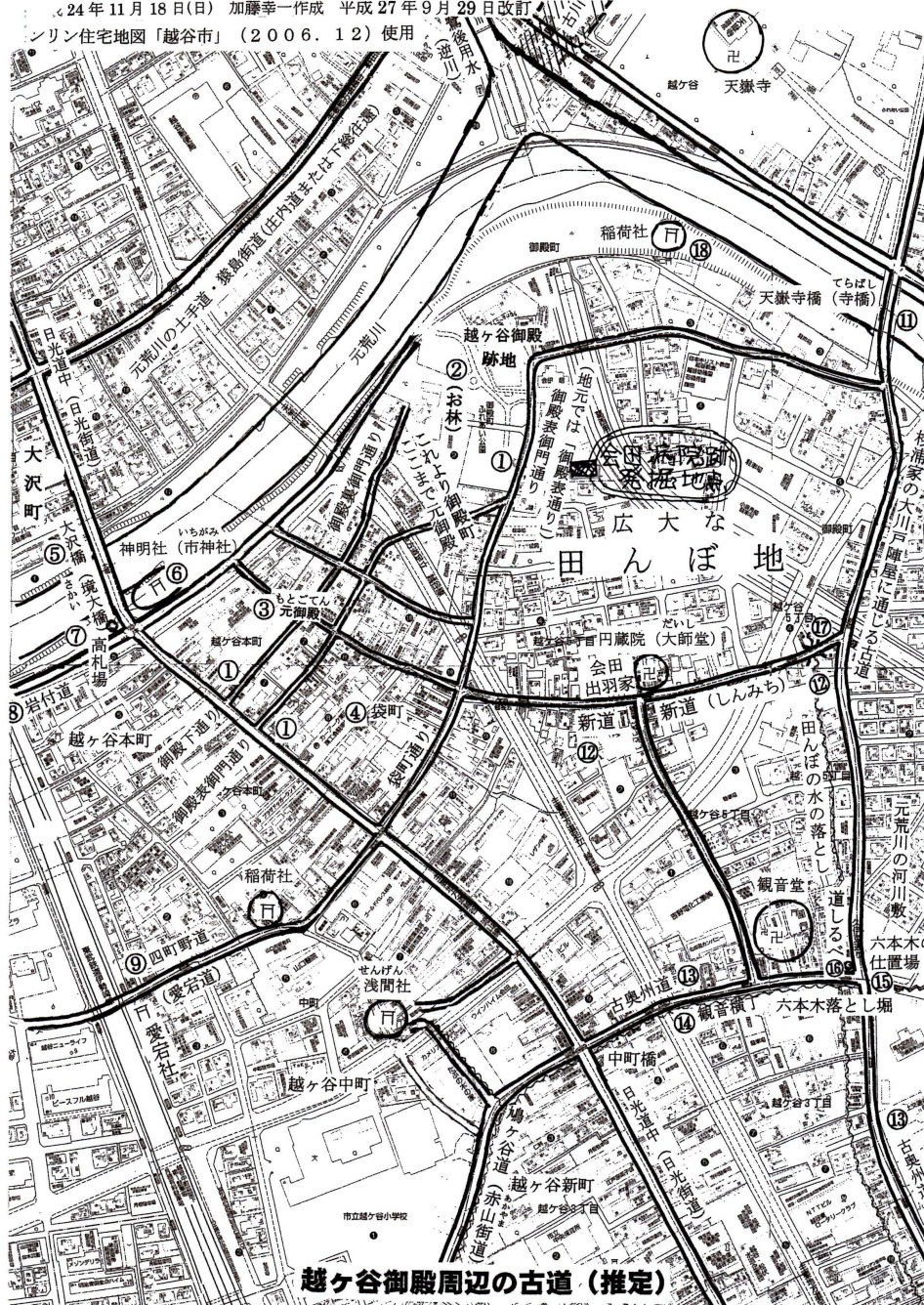
<調査成果等(平成28年2月19日現在)>

- ①御殿町地内には市指定文化財の「建長元年板碑」が存在しており、鎌倉時代(建長元年=1249年)頃から人々が生活していたことが推測されていましたが、今回の発掘調査による出土品等でそのことが裏づけられました。
- ②調査区の東半分に、南北方向の時期の違う溝が5本確認され、長期的に区画や排水等を行っていたことが分かりました。
- ③現在のところ、御殿町の地名の由来となった「御殿」の確実な痕跡は確認できていません。

お知らせとお願い
 「越ヶ谷御殿跡」という発掘の名称は、御殿跡地の外側なので適切では
 ないと思う(か産)
 越谷市教育委員会では御殿町地内における開発前に遺跡の調査を実施し、記録保存をしています。
 今後も開発の際には調査にご協力を頂くことがありますので、皆様のご理解をよろしくお願いいたします。
 また、開発を予定されている場合には、早めに越谷市教育委員会までお知らせ頂きますよう、よろしくお願いいたします。

越谷市教育委員会 生涯学習課 TEL048-963-9315 (直通)

24年11月18日(日) 加藤幸一作成 平成27年9月29日改訂
 ンリン住宅地図「越谷市」(2006.12)使用



越ヶ谷御殿周辺の古道(推定)

越ヶ谷宿にもいたキリシタン

加藤幸一

長崎県の一部の地域、例えば五島列島や平戸市にある生月（ひきつき）島に隠れキリシタンの信仰が今でも残っていることが知られているが、享保年間に越ヶ谷宿にもキリシタンがいた。

隠れキリシタンに関しては、足立区の保木間ほきまや茨城県の古河に数人ほどいたことが、明暦四年（一六五八）の『吾利支丹出申国所之覚』いでもうすくにあはしるの中に記載されている。さらに、北川辺町の古河藩領きたかわべまちの柳生村にもいたことが『吾河誌』やぎゆうによって分かっている。その名残が現在も続いている。本家祭ほんけ「ではないかとのことである。

昭和三十年代に川口の芝で発見された木造阿弥陀如来座像の胎内に納められていた十字架とマリア観音像がある。永年キリシタンの研究と調査を続けてこられた栗橋郷土研究会の加藤大政氏は、マリア観音像ではないかとされる仏像を所蔵している。資料①。

越ヶ谷宿の本陣（大沢町にあり）を勤めた福井猷貞ゆうていによって文化文政年間頃に書かれた「越ヶ谷瓜の蔓」に隠れキリシタンに関する内容がみられる。資料②。

越ヶ谷宿の新町しんまち（越ヶ谷宿内の南部）に新兵衛という者の切支丹一族がいた。場所は、日光街道沿いの赤山街道が始まる南側角地にあったと推定される。現在の田中屋呉服店の地点である。享保二年（一七一七）に、倅の籠太郎一人を残して、代々「新兵衛」を名乗る切支丹類族「キリシタン信徒の一族」が絶え、天獄寺に埋葬された。残された籠太郎は宝珠花村の親類へ引き取られた。これによって越ヶ谷宿のキリシタン一族はすべて絶えた。

越ヶ谷町の住民はすべて天獄寺の旦那でなければならぬとの一町一寺の特権が天獄寺に与えられた理由は、元荒川の改修にあたり新流路が天獄寺の敷地にかかっていた代償であるとの説があるが、越ヶ谷瓜の蔓には別の理由が紹介されている。天獄寺が新たに越ヶ谷村（日光街道沿いの村、後の越ヶ谷町）に檀家を獲得し始めた頃、越ヶ谷郷一帯に檀家を持っていた迎摂院の檀家の中に、越ヶ谷の新町組に切支丹がいることを摘発し、以後、越ヶ谷町に切支丹が入り込まないようにと一町一寺の特権を天獄寺に与えたとされるのである。

隠れキリシタンは、長崎県が「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産をめざしていることがきっかけとなって、最近クローズアップされてきたが、このような中で埼玉県東部のキリシタン研究がさらに進むことを期待する。

おおまさ

資料 1. 加藤大政氏所蔵 「マリア観音像」 に刻まれた銘文

前



後



後ろに刻まれた文字



万里^{※1}□観音^{※2}ハ弥陀乃□に

奥出^{※3}つ□

有縁^{うえん}乃衆生^{しゅじょう}

齊度^{やごど}□給^{※3}ふ



※1 「万」の字のように思われ 「万里万」は「マリマ」と読める。 マリアをさすか。

加藤大政氏は、※1の字は、本来は「ア」という字であるが、後で発見された時に罰を受けないようにと考えて、あえて余分な線を入れ判じ物にして読めなくしている。裏の読みは「万里ア」つまり「マリア」である」としている。

※2 役」の字のように思われるが、前後の文脈から「假 仮」と読ませている。

※3 志」(こころざし)の字のように思われるが、加藤大政氏は「実はこの字は「志」ではなく、十字架の記号が隠されている判じ物で、卍(十字架)と心」からなる字、意味は「キリストの心」としている。

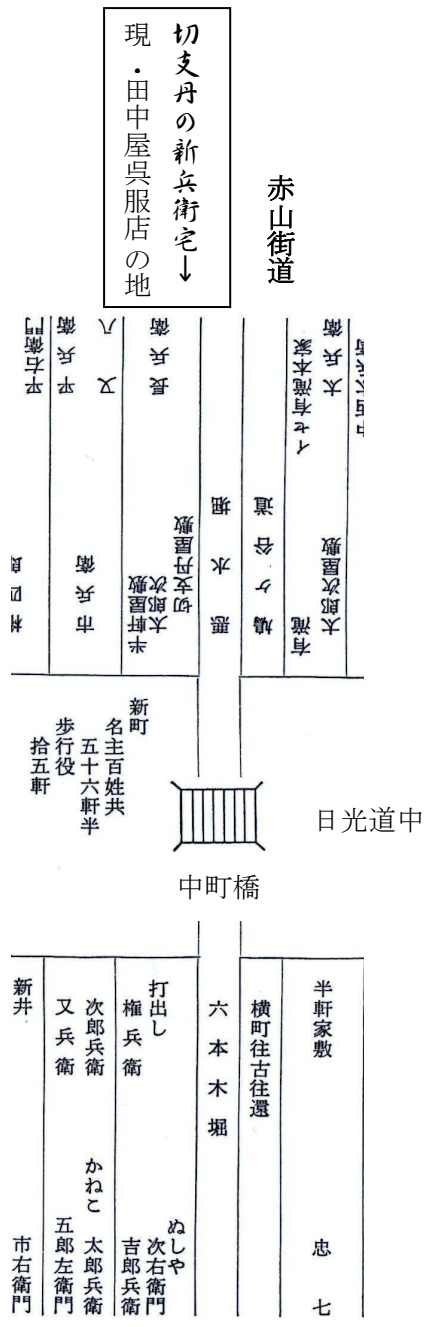
この観音像は、加藤大政氏が住まれる栗橋から幸手にかけて見つかったとされ、三十三観音の一つ、白衣(びやくえ)観音かもしれないが、江戸期に刻まれたと思われる銘文の最初の「万里万観音」の文字からして、キリスト教のマリアを意識して造立されたキリシタンの為の観音、「マリア観音像」の可能性も充分にあると思われる。

近在には、かつてはキリシタンがいた古河や古河領の柳生(やぎゅう)村(現在の北川辺地区の北部)がある。
平成二十六年七月八日 文責 加藤幸一

資料2. 文化文政年間に書かれた「越ヶ谷瓜の蔓」 福井猷貞)より

一新町組之内新兵衛と申代々切支丹類族之者有之、年々人別帳面ニハ所役人奥印仕、家内死去之節ハ其時々訴上御検使之上天岳寺へ取置申候、然処享保二年新兵衛家内之者相果、俸籠太郎壱人ニ相成申候間、願之上宝珠花村親類へ為引取、越谷町類族相絶申候事、今天岳寺境内二側目三尊弥陀之大石碑、新兵衛墓之跡也、

なお、新兵衛の住居を右の文の他の所で「新町内、橋際太郎次敷」か「町中、抱屋敷」の2つの可能性をあげている。



※この史料を作成するにあたって、秦野秀明氏の協力を得たことをここに記す。

一札之事

一

里勢
戌四十七才

※平田篤胤の後妻、越ヶ谷宿の豆腐屋の娘おりせ

右は去ル文政二卯年貴殿方江

※貴殿とは平田篤胤

嫁申候、拙者娘ニ相違無御座候、

※拙者とはおりせを養女として迎えた山崎長右衛門

以上、

武州越ヶ谷

天保九戌年閏四月 山崎長右衛門

※篤胤の門人、屋号「油長」の山崎長右衛門篤利

平田大角殿

※平田篤胤

一札之事

里勢

戌四十七才

右は去ル文政二卯年貴殿方江
嫁申候、拙者娘ニ相違無御座候、
以上

武州越ヶ谷

天保九戌年閏四月 山崎長右衛門

平田大角殿

会田金物店の壁画(越ヶ谷本町)

※この項目は平成 29 年 4 月 16 日に新たに充実させて追加した資料です。

旧日光街道沿いの「会田金物店」は、江戸時代には屋号が「富田屋 (とんだや)」と呼ばれた堀伊左衛門の家屋で、明治の針屋火事と芋金火事の 2 度の越ヶ谷町の大火の難をも逃れ、江戸時代より残る越ヶ谷宿で一番古い建物である。途中で現在の会田家の住まいに所有者が変わるのです。

ここ (富田屋・堀伊左衛門家、現・会田金物店) に幕末に流山から板橋に官軍によって送られてくる近藤勇が泊まったとの説があります。

近藤勇がどこに宿泊したかとの説は、他に以下の 2 点があります。

- ・有馬藤太氏は近藤勇が宿泊したのは粕壁宿だとの粕壁説を唱えています。
- ・富田重太郎氏は、「越ヶ谷へ卯の刻 (日の出の時刻) 到着」としています。

越ヶ谷宿の現在の会田金物店の建物に宿泊したとの説は以下の通りです。

八島理^{おさむ} (通称、晃正) 氏は、昭和三十三年九月発行の「越谷町秘話」の中で、さらに推し進めて、「越谷町本石 2 丁目 (現、越ヶ谷本町)、堀伊左衛門が、当時、越ヶ谷宿の名主で、この家は勇が取調べを受けたところらしい。」としています。八島氏は、当時の名主宅に立ちより宿泊したのではないかとの前提から推測したのではないだろうか。根拠となるものはないと思われます。堀伊左衛門家 (屋号「富田屋とんだや」) の建物は、現在、「会田金物店」(越ヶ谷本町 3 2) となっています。

そのうちの八島説が一般に広がり、「近藤勇は越ヶ谷の現在の会田金物店に泊まった」と信じられるようになったものと思われます。

実は、毎日新聞 2015 年 12 月 15 日の「新選組近藤勇捕縛の古文書 熊谷では手控帳に」の中の記述によると、秦野秀明氏の考察から大沢町と断定できるようです。この記述は地元のことが記述された文書であるので信頼性が高いと思います。(後に掲載した新聞資料を参照のこと)

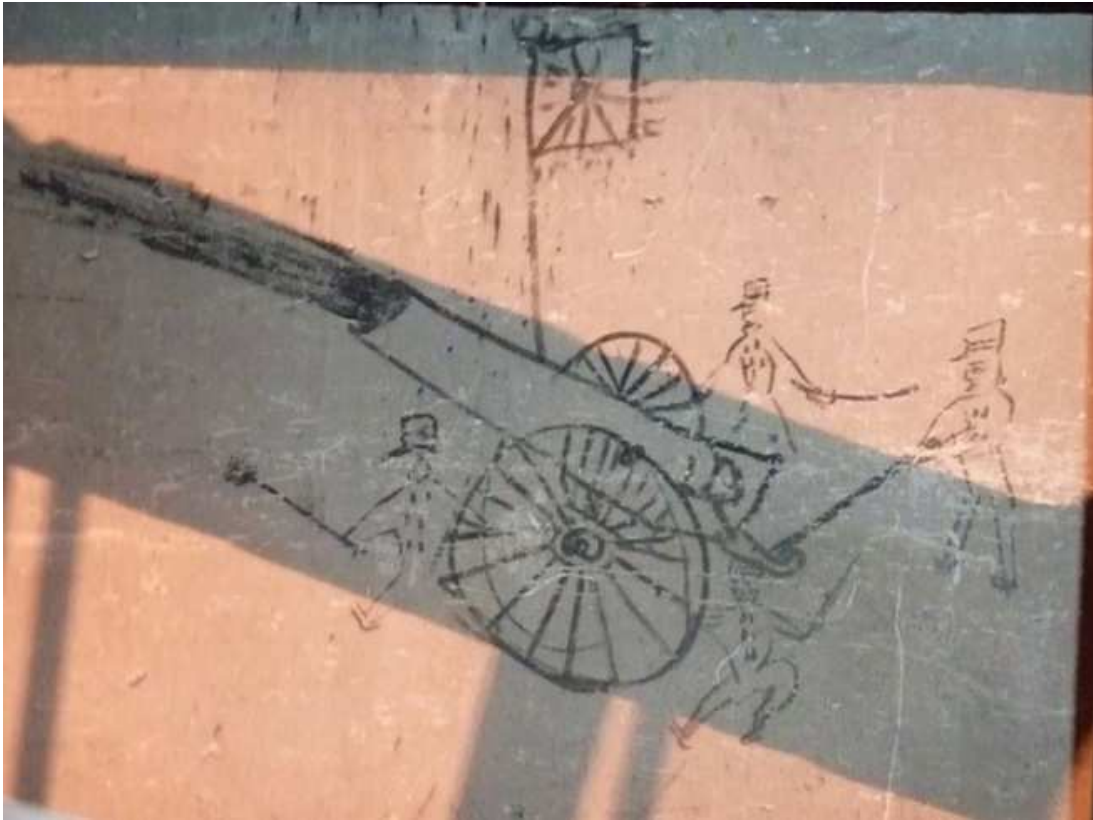
大砲とその大砲を撃つ二人の兵隊の絵が描かれているこの壁画が会田金物店にあります。幕末の会津戦争の時に官軍が大砲を移動しながらこの富田屋の前を通った時の様子ではないかとの説があります。しかしながら、旗の絵をみると、官軍が掲げた「錦の御旗」ではありません。日章旗 (日の丸) なら賊軍が使っていた旗ですが、その後になってから生まれる旭日旗 (きよくじつき) のように思えます。ますます謎が深まるばかりです。

富田屋関係の人が、毎日店先を掃除しているのであろうに、店先ではないにしてもいたずら半分、或は記録を残そうとして書くのは考えにくいです。そばを通った軍隊の一人が立ち寄って落書きをしたと推測ができます。

以上は、あくまでも推測の域に脱していません。裏付けとする証拠がない限り、すべてが謎となります。

なお、その時のもう一つの落書きもあります。屋根のある建物の中に人々が寄り添っているようにも見える絵です。

- ・会田金物店の壁画の写真



原田民自氏撮

- ・会田金物店のもう一つの絵



原田民自氏撮影

・近藤勇は越ヶ谷ではなく、「大沢町」に宿泊したことを裏付ける新聞資料
手控え帳の持ち主の弥五郎は、大林村の瀬尾家の名主です。

毎日新聞 2015 1/5 (木)

(第3種郵便物認可)

新選組「近藤勇」捕縛の古文書

熊谷では手控帳に

近藤勇が捕らわれた際の岩村田藩兵の動きを記した新発見の古文書を囲む(左から)池田信三さん、佐藤繁さん、根岸友憲さん、伊澤隆男さん、佐藤さん宅で



収集資料に同じ記載

幕末期に反幕府勢力の取り締まりに活躍した新選組局長・近藤勇が千葉県流山市で捕らえられた状況を示す古文書が長野県佐久市の池田信三さん(76)宅で見つかったことを本紙埼玉版(11月17日付)が報じていたが、熊谷市でも同様の史実を記した文書が発見された。岩村田藩(佐久市)藩士らが「近藤三悪党共」を取り押さえたとする内容で、本紙記事を読んだ熊谷市新堀の郷土史家、佐藤繁さん(74)が自身の収集資料にも同様の記載があると、池田さんに連絡して判明した。

【鶴沢哲雄】

郷土史家・佐藤さん

佐藤さんは江戸時代の武家は、持ち主として記された家社会の研究をしている。7「大林村(現越谷市)」の「弥年ほど前に前橋市の古書店 五郎」は「名主」ではないかと数百点の文書類を購入してと推測する。内容は雑記帳でいたが、その中に含まれる日光・奥州街道を往来する大福帳型の「手控帳」に近藤名や宿場間の連絡事項、人足が捕らわれた際の記述があるの支払いなどさまざまな事項を記している。

手控帳は縦18センチ、横13センチ、厚さ2センチ。表紙には「慶応四権之助様 堀恭之進様」とあり、辰三月とあり、佐藤さん、岩村田藩「家老代」と記

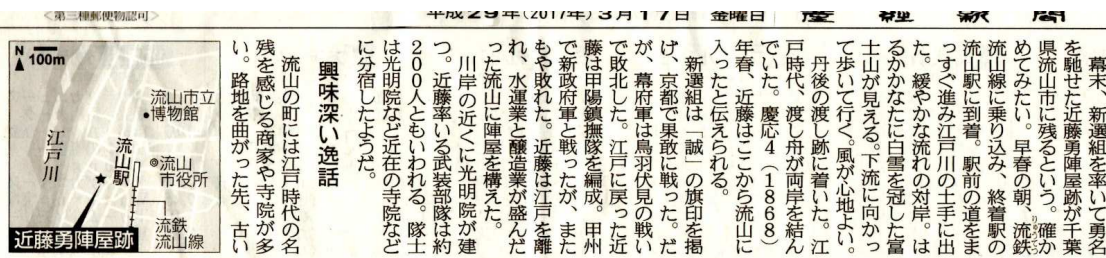


岩村田藩の動向が記されていた「手控帳」

されている「権之助」は、戊辰などの写しではなく、さまざま辰戦争の際に関東出兵したまな情報の一部として官軍の同藩の指揮官の一人。同藩の動きを記録したものではない73人の行動として「辰四月か」と分析。この内容は、佐一日夜千住宿御泊り 同二日久市の池田さん宅で見つかった宿御通行粕壁宿御泊り 同三日当宿御通行にて流山へる。 今月7日には池田さん、来たり悪党共取り押さえた大沢町へ御立戻り 翌四日当宿池田家文書を研究している川口市の郷土史家・伊澤隆男さん(74)、熊谷市で江戸時代が共」を取り押さえる前後の立ち寄り先として「当宿」(越谷宿)粕壁宿(春日部宿)「大沢町」(越谷)が登場する。佐藤さんは「手控帳は書状

後にも史実発掘で協力していくことを約束した。

・流山で連行された近藤勇に関する新聞記事



大人の遠足

千葉・流山市 近藤勇陣屋跡

盟友・土方歳三と最後の別れ

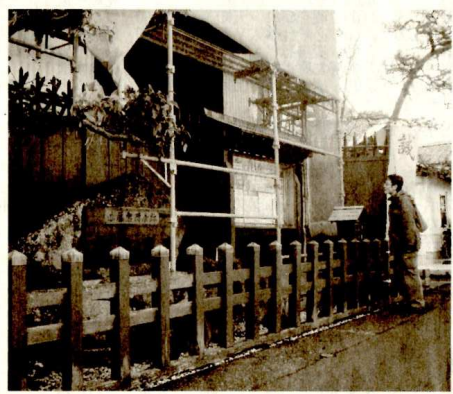
土蔵の前に石碑があった。「近藤勇陣屋跡」と刻まれていた。ここが、新選組ファンが訪れる。千葉市の会社員、前野智徳さん(43)は「激動の幕末、誠を買って自分の信念で生きていくことはできない。ぶれない」ところがかっこいい」と笑顔で話した。

幕末、この地に醸造家、永岡家(一説に長岡家との表記も)の屋敷があった。明治初期、永岡家は一連の騒動の影響もあってか、廃業。秋元浩が屋敷を買取った。秋元浩司さん(83)「会社会長」は「永岡家は当時、1500坪の豪邸でした。近藤勇は流山で一番立派な屋敷に陣取ったのです」と語る。

近藤と盟友の土方歳三は陣立てのさい、敷地内の稲荷大明神を祭る祠で戦勝祈願を行ったという。近藤は10層の奥座敷に滞在した。往時の屋敷は解体されたが、床の間の柱は今も秋元家に伝わる。「隊士は蔵人用の大部屋で寝泊まりしていた。浪人が多かったようです。新政府軍が現れたとき、槍や刀を残して退散したとか」

新政府軍が包囲

4月、新政府軍が流山に攻め入った。陣屋を包囲した。近藤は切腹を覚悟された。だが、土方が強いきざめという。近藤は切腹を思いとどまり「大久保大和」と名乗って出頭した。これが土方との最後の別れとなった。(塩塚保、写真も)



近藤組ファンが訪れる近藤勇陣屋跡。古い土蔵が往時の面影を伝える。千葉県流山市

■近藤勇陣屋跡 千葉県流山市流山2の108 JR武蔵野線・常磐線新松戸駅から流鉄流山線幸谷駅で乗り換え。流山駅下車。徒歩約5分。(株)秋元敷地内の土蔵前に石碑。隣接の店で近藤勇ゆかりの酒やグッズ販売。

■流山市立博物館 流山駅から徒歩約7分。前9時半〜午後5時。曜休館。無料。【問】☎04・7159・3434。

土方は流山を脱出し、東北地方を転戦。北海道に渡って戦い抜き、壮烈な戦死を遂げた。男の美学を貫いた。流山市立博物館に足を伸ばした。2階に「新選組流山に入る」という常設コーナーがある。秋元家が寄贈した古い階段も展示されている。

・越谷市内の大間野村の「よしずや」の一件

二人の付き人を従えて乗馬してきた近藤勇は、翌朝になると大小の刀を差したまま網はりの山駕籠に入れられ、近藤勇の奪還を恐れてか、越ヶ谷から間道の赤山街道(越ヶ谷小学校の裏門側の道)を通過して板橋に向かいました。その途中、綾瀬川に架かる一の橋(現在の旧・一の橋、当時は「一ノあじ橋」と呼ばれた)のたもとの「よしずや河岸」の茶屋(関根氏)で休息し(四月五日とされる)、弁天藤(現在は出羽公園に移植)を見ながら、「綾なる流れに 藤の花匂う わが生涯に 悔いなし」との辞世の句を詠んだとの言い伝えがありますが、確証はあるません。実際には板橋で偽名がばれたあとに辞世の漢詩を詠んでいます(四月二十五日)。

・板橋宿までのコース

その後、若年寄として偽名の「大久保大和」を名乗った近藤勇を連れた一行は、浦和宿に向かいます。そして、田島村の名主、中村仲治郎方で休息しましたが、同家の庭に梅の古木(現在は、薬王院に移植)があり、勇はここでも和歌を詠んで、その枝に短冊を結び付けていったとの言い伝えがあるといわれています。一行は荒川の笹目の渡しを越えて板橋の総督府の本陣のある板橋宿に入ります。面通しによって近藤勇と判明し、処刑(斬首)は、板橋宿のはずれの寂しいところ、今の板橋駅東口前広場あたりです。

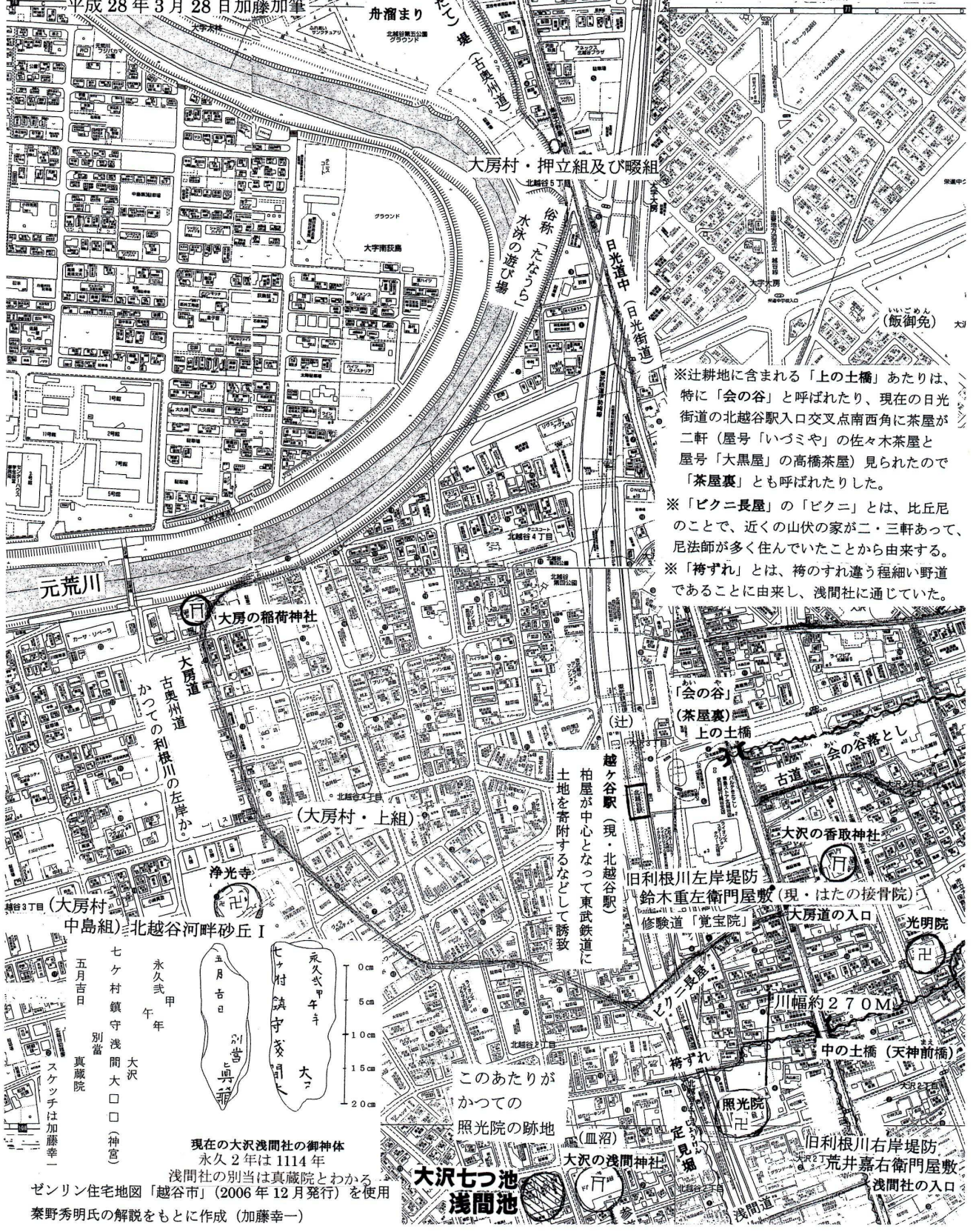
大林河畔砂丘 大房の薬師堂
 NPO 法人越谷市郷土研究会 河川史研究倶楽部主催
 平成25年4月4日(木)

大房の薬師堂
 大同2年(807)創建
 別名「押入の薬師」「大江りの薬師」「鶉の森の薬師」

大沢町巡検

案内説明者 秦野秀明氏

平成28年3月28日加藤加筆



※辻耕地に含まれる「上の土橋」あたりは、特に「会の谷」と呼ばれたり、現在の日光街道の北越谷駅入口交叉点南西角に茶屋が二軒(屋号「いづみや」の佐々木茶屋と屋号「大黒屋」の高橋茶屋)見られたので「茶屋裏」とも呼ばれたりした。
 ※「ピクニ長屋」の「ピクニ」とは、比丘尼のことで、近くの山伏の家が二・三軒あって、尼法師が多く住んでいたことから由来する。
 ※「袴ずれ」とは、袴のすれ違う程細い野道であることに由来し、浅間社に通じていた。

越ヶ谷駅(現・北越谷駅)
 柏屋が中心となつて東武鉄道に土地を寄附するなどして誘致

このあたりが
 かつての
 照光院の跡地
 大沢の浅間神社

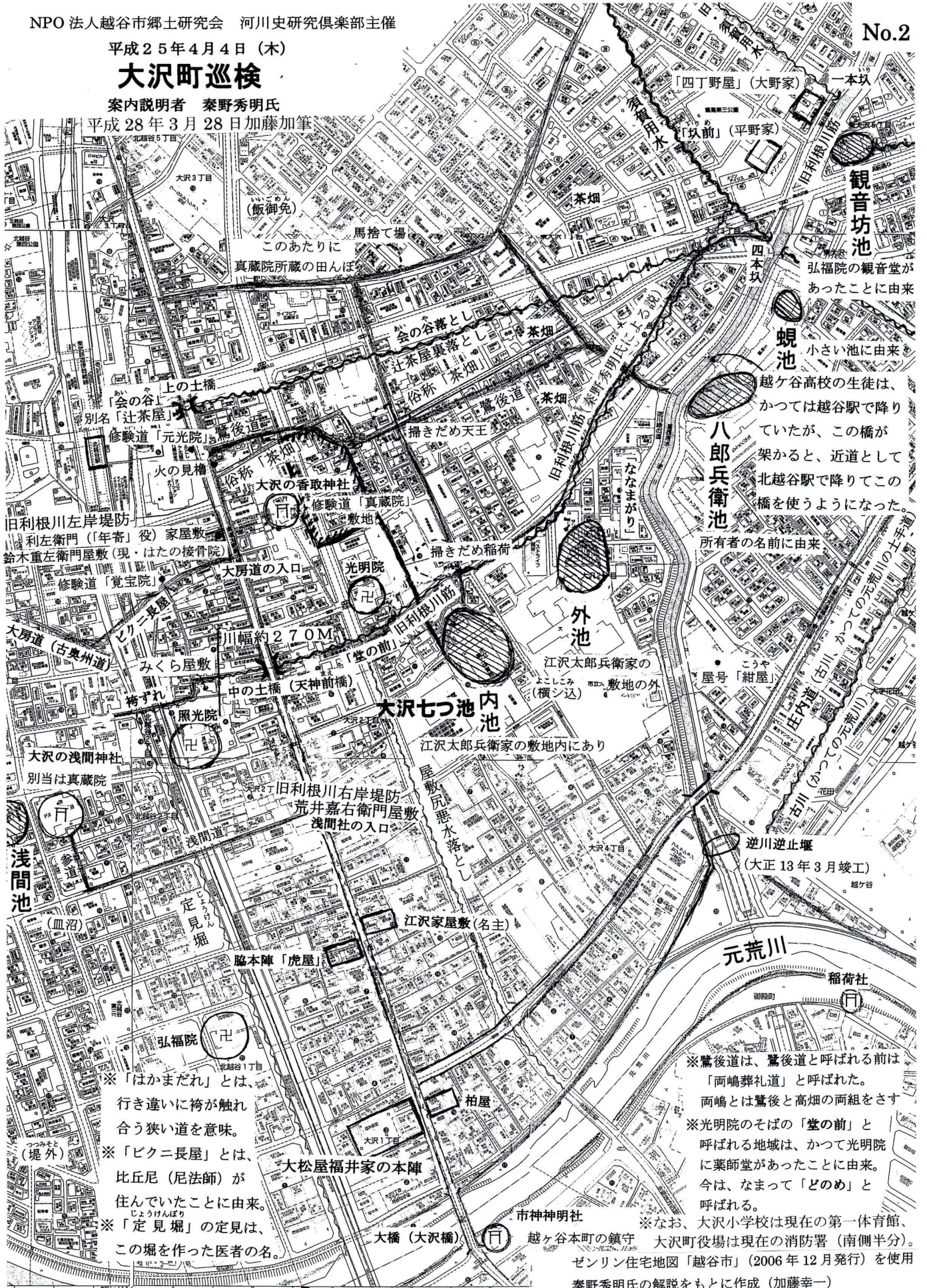
現在の浅間社の御神体
 永久2年は1114年
 浅間社の別当は真藏院とわかる
 ゼンリン住宅地図「越谷市」(2006年12月発行)を使用
 秦野秀明氏の解説をもとに作成(加藤幸一)

平成25年4月4日(木)

大沢町巡検

案内説明者 秦野秀明氏

平成28年3月28日加藤加筆



観音坊池
弘福院の観音堂があつたことに由来

蜷池
小さい池に由来

八郎兵衛池
越ヶ谷高校の生徒は、かつては越谷駅で降りて、この橋が架かると、近道として北越谷駅で降りてこの橋を使うようになった。所有者の名前に由来

外池
江沢太郎兵衛家の敷地の外(横シ込)

内池
江沢太郎兵衛家の敷地内にあり

逆川
逆川止逆堰 (大正13年3月竣工)

元荒川
稲荷社

このあたりに
馬捨て場
真蔵院所蔵の田んぼ

会の谷とし
別名「辻茶屋」
修験道「元光院」

俗称「茶畑」
大沢の香取神社
修験道「真蔵院」

川幅約270M
大房道(古奥州道)
みくら屋敷

大沢の浅間神社
別当は真蔵院

浅間池
定見堀

※「はかまだれ」とは、行き違いに袴が触れ合う狭い道を意味。
※「ピクニ長屋」とは、比丘尼(尼法師)が住んでいたことに由来。
※「定見堀」の定見は、この堀を作った医者名。

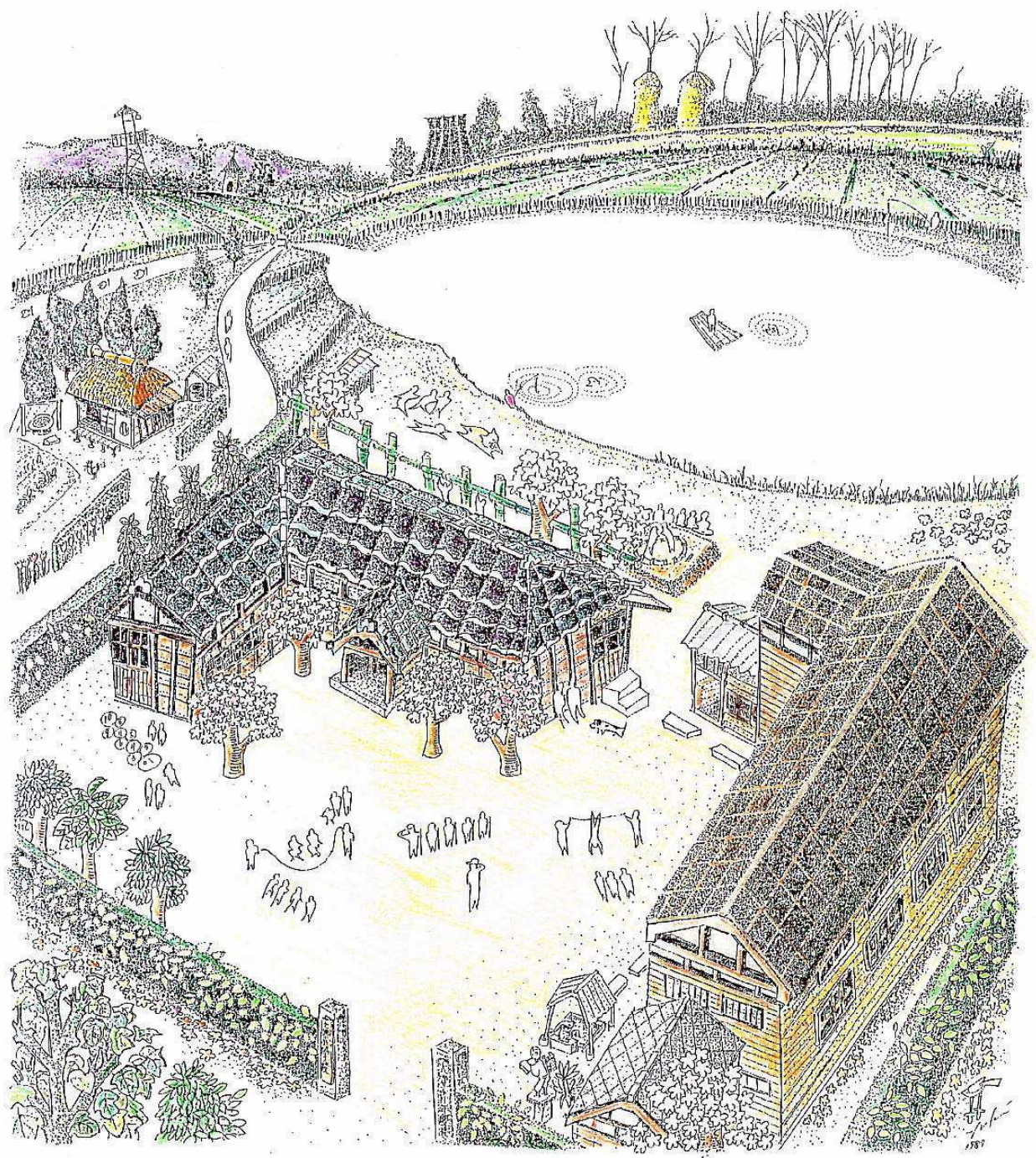
大沢七つ池
江沢太郎兵衛家の敷地内にあり

江沢家屋敷(名主)
脇本陣「虎屋」

大松屋福井家の本陣

市神神明社
大橋(大沢橋)

※鷲後道は、鷲後道と呼ばれる前は「両嶋葬礼道」と呼ばれた。両嶋とは鷲後と高畑の両組をさす
※光明院のそばの「堂の前」と呼ばれる地域は、かつて光明院に薬師堂があつたことに由来。今は、なまって「どのめ」と呼ばれる。
※なお、大沢小学校は現在の第一体育館、越ヶ谷本町の鎮守 大沢町役場は現在の消防署(南側半分)。ゼンリン住宅地図「越谷市」(2006年12月発行)を使用 秦野秀明氏の解説をもとに作成(加藤幸一)



大沢小・中学校と内池

大沢香取神社の彫刻



大沢香取神社



大沢の香取神社の元社
鷹後（さぎしろ）香取神社

明治元年（1868）に建立された本殿（奥殿）には、東西南北、四方の壁にとても立派な彫刻が見られる。棟札によると大沢香取神社の奥殿は幕末の「慶応二丙寅年 八月吉祥日」の「再殿」と記載されている。慶応2年（1866）に再建が行われ、明治元年に終了したのであろう。彫刻師は、浅草山谷町の長谷川竹次郎である。明治以前の様子も描かれた貴重な彫刻と言える。

資料作成日 平成25年2月 作成者 越谷市郷土研究会 加藤幸一 協力者 秦野秀明氏
この資料を作成するにあたり、大沢香取神社様の多大なるご協力がありましたことをここに記します。

大沢香取神社本殿の彫刻 1. 東側面・床上
(胴羽目・脇障子)



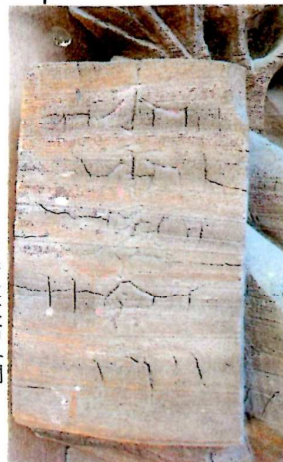
富士の巻狩 (源頼朝)
曾我兄弟の仇討ち場面か



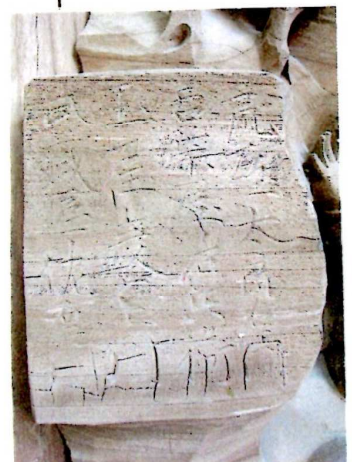
富士の巻狩 (仁田四郎忠常の猪退治)
じった



やおよろず
八百万の神楽奏 (天の岩戸)
あま



木香屋太右工門



虎屋太郎右工門
若葉屋右兵衛
玉屋彦右工門
武蔵屋佐右工門

大沢香取神社本殿の彫刻 2. 東側面・床下 (下羽目)



布袋

中嶋屋
治兵衛



中嶋屋
治兵衛



寿老人



七福神 (布袋・大黒・毘沙門)



福祿寿



七福神 (寿老人・恵比寿・福祿寿・弁財天)



屋号のマーク



大黒



吉田屋利助

大沢香取神社本殿の彫刻 3. 東側面・屋根下



牧牛



牧牛



越ヶ谷本町
田中屋熊蔵

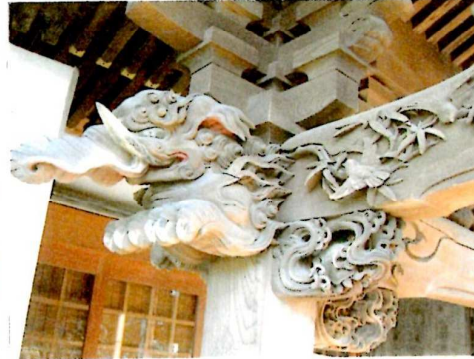


越ヶ谷本町
黒田熊蔵



黒田市左工門

大沢香取神社本殿の彫刻 4. 東側面・屋根下（拝殿側のみ）



大沢香取神社本殿の彫刻 5. 西側面・床上 (脇障子・胴羽目)

「長谷川竹次郎」は、大沢香取神社のこの彫刻をした浅草山谷町の彫物師。



長谷川竹次郎



鹿嶋大神宮
香取大神宮

ごはい
向拝側



たちからおのみこと あま
手力男命 (天の岩戸)



猿田彦大神



「鹿嶋・香取神宮」の旗



(屋号「山七」)
大黒屋
店中



鑑純屋万治郎
鑑純屋傳吉
靄屋豊吉
秋田屋源兵衛
小松屋覚右衛門
山城屋伊三郎
福井万治郎
稲葉屋治左衛門
福井權右衛門



大沢香取神社本殿の彫刻 6. 西側面・床下（下羽目）



中嶋清兵衛



鶏



鶏



中島屋清兵衛



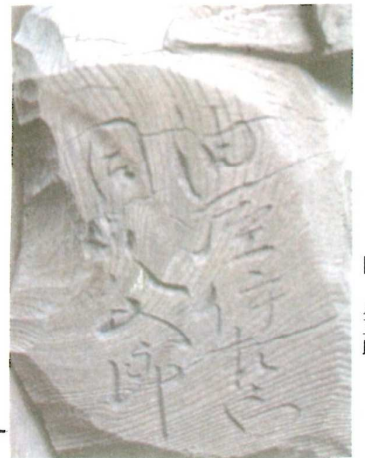
油屋佐吉



孔雀

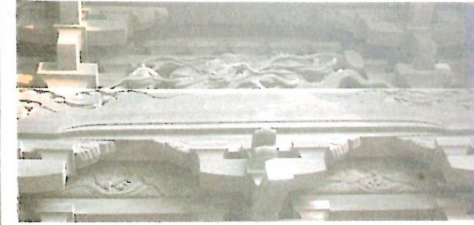


孔雀



油屋伊左工門
同 八五郎

大沢香取神社本殿の彫刻 7. 西側面・屋根下



池ノ端富蔵

碁打ち



竜



虎



獅子舞

□村辰五郎

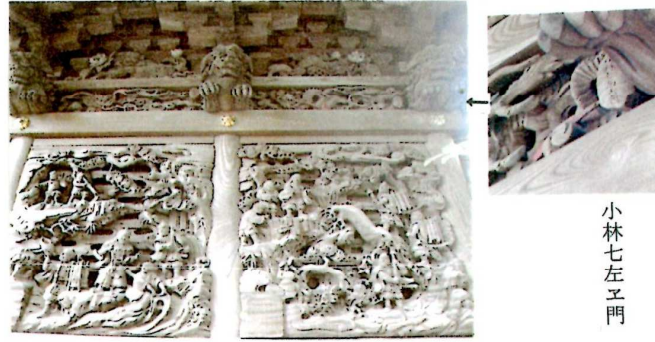
大沢香取神社本殿の彫刻 8. 西側面・屋根下（拝殿側のみ）



大沢香取神社本殿の彫刻 9. 北側面・床上



橋屋権右工門
下妻屋彌七
戸倉屋久兵工
廣田屋豊次郎



小林七左工門

和泉屋長兵工
河内屋次郎左工門
富口屋茂助
同 吉兵工



八百万の神楽奏の裏面



源頼光と家来の四天王の一行が山伏に変装して大江山の酒吞童子の鬼退治に行く様子

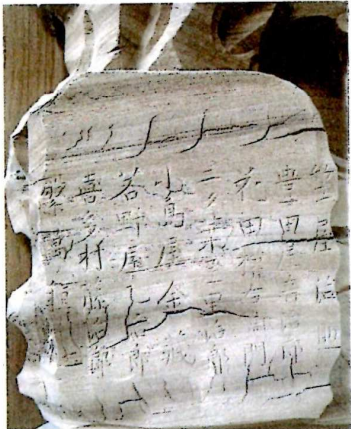


手力男命の裏面

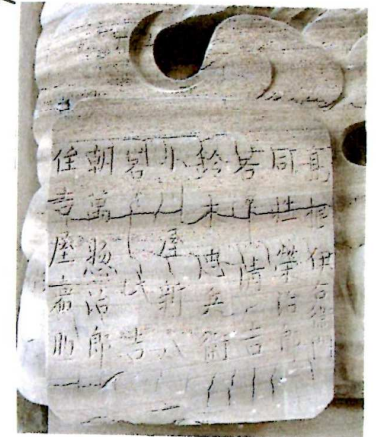


向かって左の写真：見張りの鬼たちに毒の酒を差し出す場面

笠屋治助
豊田屋音治郎
花田権右衛門
二夕葉屋里治郎
小島屋金蔵
野屋乙治郎
喜多村藤治郎
萬種七



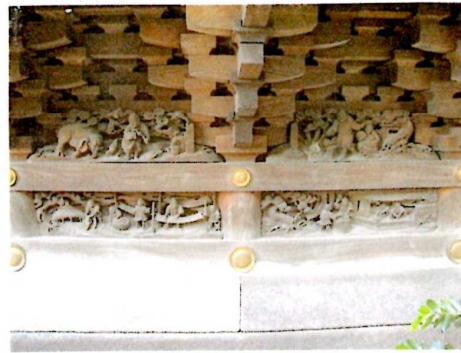
島根伊右衛門
同姓榮治郎
若よし清吉
鈴木忠兵衛
小川屋新八
若よし此吉
朝萬惣治郎
住吉屋嘉助



大沢香取神社本殿の彫刻 10. 北側面・床下（下羽目）



地蔵橋組
納主
紺屋吉蔵



地蔵橋組
納主
紺屋吉蔵

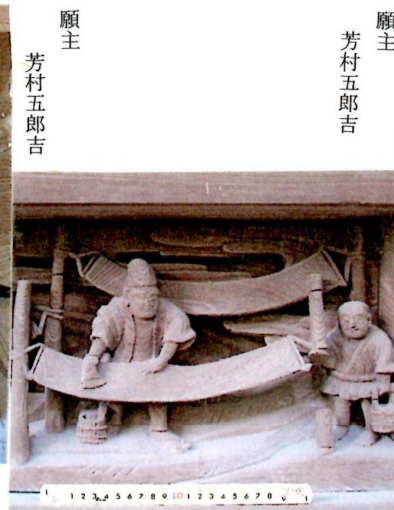
彫刻された羽目板（下段）の裏側面



上段：二十四孝のうちの「大舜」
下段：鶯後用水（逆川）での紺屋の作業風景



願主
芳村五郎吉



願主
芳村五郎吉



彫刻された羽目板（下段）の裏側面

上段：二十四孝のうちの「郭巨」
下段：鶯後用水（逆川）での紺屋の作業風景



善



善

砧（きぬた）



善

吉蔵

大沢香取神社本殿の彫刻 11. 北側面・屋根下 (墓股) かえるまた



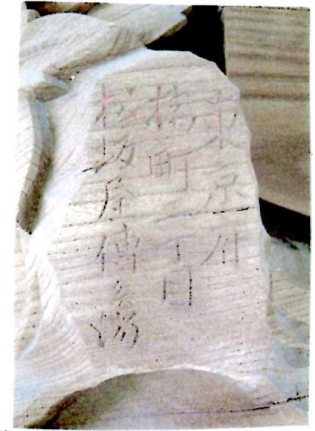
東京府
橋町二丁目
松坂屋傳兵衛



親子獅子



親子獅子



東京府
橋町二丁目 (現・東日本橋三丁目)
松坂屋傳兵衛



小林七左衛門



小林七左衛門



大沢香取神社本殿の彫刻 12. 南側（正面）・全体



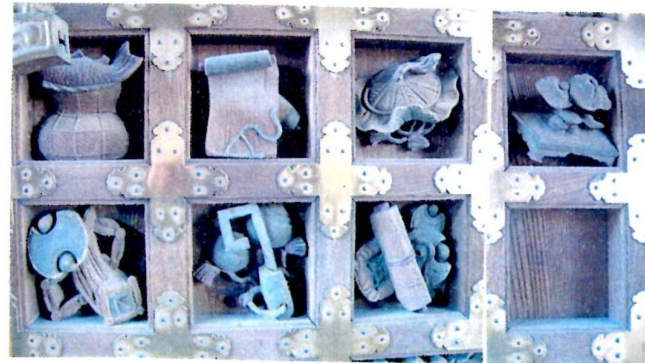
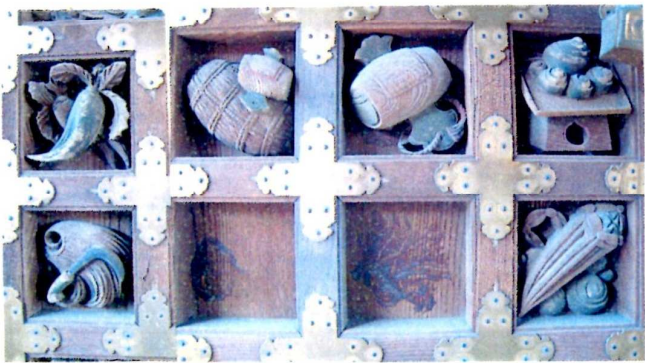
大沢香取神社本殿の彫刻 13. 南側（正面）・扉



荒井
吉左門



高嶋
万次郎



大沢香取神社本殿の彫刻 14. 南側（正面）・上部



「唐子群遊（からこぐんゆう）」のうちの「籠伏の鶏」

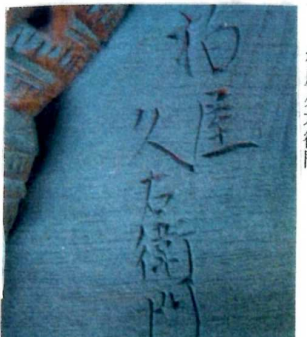
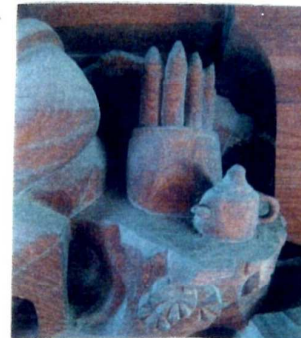
左右の彫刻の中に「書」の柏屋彌平太と「籠伏の鶏」の柏屋久右衛門の像が刻まれている。



「琴棋書画（きんきしよが）」のうちの「書（習字）」



柏屋彌平太（番号は「水佳」）



柏屋久右衛門



大沢香取神社本殿の彫刻 15. 南側（正面）・屋根下



南側（正面）・屋根下（本殿から拝殿に向かったの写真）



大沢香取神社本殿の彫刻 16. 本殿棟札 むなふだ

高さ一〇四センチメートル、幅上部二五センチメートル、下部二一・五センチメートル



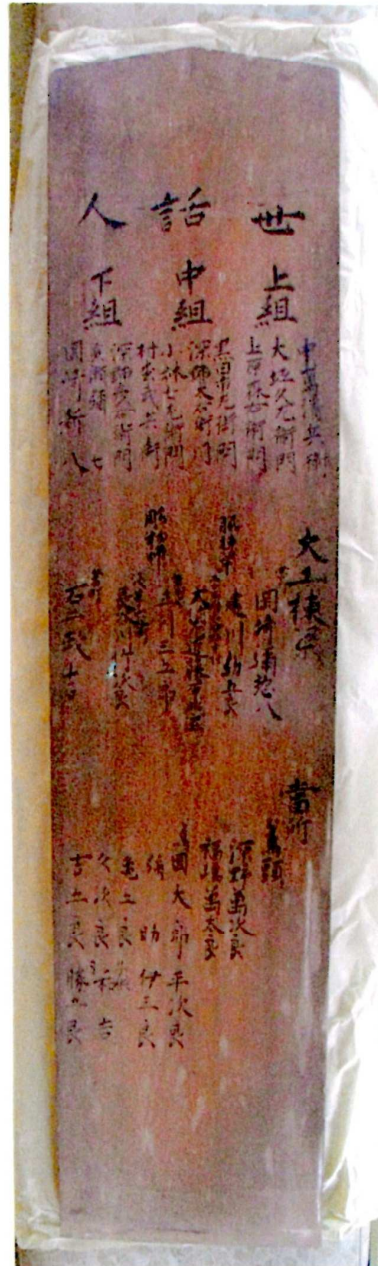
慶応二丙寅年

武州埼玉郡新方領大沢町

(バン) 奉再殿香取大明神本地供氏子安全如意攸所

八月吉祥日

別当光明院住法印諦信代



世 上組 中島清兵衛
大垣久左衛門
上原森右衛門

大工棟梁 当所
岡崎弥惣八

当所 鳶頭
深野萬次良
福嶋萬太良

話 中組 黒田市左衛門
深野太右衛門
小林七左衛門
村松武兵衛

脇棟梁 二合半領三輪野井村
大竹左近藤原照滋
草加宿

鳶 岡大郎 平次良
弥助 伊三良
亀五良 子供

人 下組 深野彦右衛門
広瀬彌七
岡崎新八

彫物師 浅草山谷町
長谷川竹次良

当所 同
吉五良 和吉
勝五良

石工政吉